

## SPECIAL REPORT

## 第41回酪農海外現地実務研修会報告

本会議は、10月4日から10月13日の10日間にわたり酪農海外現地実務研修会をニュージーランド・オーストラリアで実施した。41回目を迎えた今回の研修会には、生産者団体、乳業者、関係機関等から20名が参加し、両国における「国際市況の影響が大きい酪農経営の現状と展望」、「売上が乳製品輸出価格に連動する乳業メーカーの経営戦略」、「酪農経営支援組織の機能と役割」などについて調査、研修した。

## 1. 草地型・輸出指向型酪農の両国

ニュージーランドとオーストラリアは、政府による酪農制度や補助金を廃止し、自由競争市場の下で輸出を主眼に置いた酪農産業を展開している。そのため、生産者も国際市況の影響を直接受ける構造になっている。両国ともに広大な草地に立脚した酪農を展開しているが、ニュージーランドの方がより草地型・輸出指向型酪農となっている。オーストラリアでは生乳生産量の30%を、ニュージーランドでは90%を輸出している。草地立脚型酪農のため、季節繁殖を行い、生乳生産量は牧草が成長しない冬に少なく、牧草の成長が旺盛な初夏にピークを迎えるという、独特の生産カーブを描いている。

## 2. ニュージーランド酪農の特徴

ニュージーランドでは、北島のワイカト地方が国全体の3割に相当する生乳を生産する主産地であり、今回の研修も同地域にあるLIC、デイリーNZ、フォンテラ・テラパ工場、酪農家を訪問した。

LICは家畜改良、精液供給、人工授精、牛群検定等を行う、農家が株主の会社である。乳牛改良の方向性は米国と違い、乳量よりも、飼いやすく長命連産で、生涯において乳固形分をどれだけ出すかが重視されている。

そのLICと同じ敷地にあるデイリーNZは、いわゆるチェックオフ団体、農家の課徴金で運営されている支援団体で、情報提供等を行っている。ニュージーランドでも新規就農者をいかに増やすかに注力していることが印象的であった。

ニュージーランドにおいては、フォンテラが最大の国際的な巨大農協系乳業メーカーであるが、海外、主に中国資本の乳業が増加しており、集乳量は変わらないものの、国内シェアがここ10年で95%から85%へ低下している。これについては、世界的な生乳確保競争が始まっており、日本の乳業もどうかしていられない状況ではないだろうか。

フォンテラに出荷している酪農家も訪問した。そこでは、オーナーが農地や搾乳施設を、シェアミルクラーが搾乳牛を所有して労働を提供し、収入を半分ずつに分ける「50-50シェアミルクラー契約」を結んでいた。自分の農場を持たなくても、段階を踏んでオーナーになることができるのがシェアミルクラー制度である。しかし、50年前に現オーナーがやってきたときには4年後に自分の農場を買うことが出来たが、今は農地が高騰しており、オーナーになる道はあっという間に険しくなっているとのことであった。



酪農家との意見交換（ニュージーランド）

### 3. オーストラリア酪農の特徴

オーストラリアの酪農主産地はヴィクトリア州であり、同国の生乳生産量の6割を占め、その9割が乳製品向けになっている。研修では同州のメルボルンにあるデイリーオーストラリア、メルボルンの東に位置するギプスランドと呼ばれる地域にあるフォンテラオーストラリアのダーナム工場、そこに出荷している酪農家を訪問した。デイリーオーストラリアは課徴金を財源とするチェックオフ制度実施団体であり、マーケティング、研究開発、情報発信をしている。2大スーパーのウールワースとコルズの小売りの力が強すぎて、牛乳が1リットル1ドル（約90円）で売られている現状を問題視していた。

フォンテラオーストラリアのダーナム工場では、豪州で集乳量1位であったマレーゴールバンから、フォンテラがシェアを奪っている要因として、価格的魅力に加えて、財政的な支援といった各種サービスの提供を挙げていた。

フォンテラへの出荷農家では、昨年は乳価下落で本当に経営が厳しく、利益がほぼ出なかったと聞いた。その際に行ったコストカット策の影響により、生乳生産量が回復するには2年くらいかかるとのことであった。



広大な放牧地の視察（オーストラリア）

今回の訪問で印象に残ったのは、日本と違い、酪農が主要な産業である国においても、新規就農者確保や小売りの強大なバイイングパワーが問題になっている等、共通の課題をかかえていることである。また、両国ともに国際市況の影響を受けるため、乳価の乱高下が離農や生産基盤の弱体化に繋がっており、我が国の指定団体が酪農の経営安定に果たしている役割は本当に重要であると、団長、副団長ともに述べていた。

最後に、参加者の方々から、参加して良かったと言う声を少なからず頂いたことで、事務局としては報われた思いです。本研修に関わって頂いた皆様に感謝申し上げます。（事務局：高垣）



研修参加者による記念撮影（デイリーNZにて）